

少数言語組み合わせ家庭の継承語教育を支援する取り組み —日蘭家庭を対象として—

荻田朋子（大阪大学大学院生）

1. はじめに

本調査の背景について説明する。私はオランダ人の配偶者との間に3人の子どもがいる。2014年から2016年までオランダのマーストリヒトにあるオランダ国立南大学という高等職業教育機関（HBO）に外国人常勤日本語講師として勤めていたが、当時は小さい子どもを抱えながら不慣れた海外で生活することに精一杯で、ヨーロッパにおける複言語教育に関心を払わずに過ごしてしまった。帰国後、子どもが小学校に入り、CLD児（Culturally and Linguistically Diverse Children）を育てる親という当事者の立場から、日本の外国ルーツの子どもに対する日本語教育の支援について関心が高まった。同時に、家庭内における継承語教育の困難さに直面し、特に、日蘭のような少数言語組み合わせ家庭では現地語ではない母語は簡単に喪失してしまう可能性が高いことを危惧している。中島（2017）は、継承語が子どもの人格形成、アイデンティティ、学力獲得の上で重要な役割を果たしており、継承語の喪失を看過するのではなく、継承語獲得のプロセスを「見える化」して教師や保護者の「継承語をベースとするマルチリンガル教育」に対する認識を高めるとともに、母語・継承語で教育を受ける子どもの権利を守る国の言語政策の実現に向けて力を結集することこそが、継承語教育に携わる研究者・実践者の責任と言えよう（p.27）と述べている。そのため、まずは自身の家庭の問題ともなる少数言語組み合わせ家庭における継承語教育の支援はどのように可能か、その示唆を得るために日蘭家庭を対象として調査を行うことを目的とした。

2. 継承語教育から繁生語教育へ

「継承語（heritage language）とは、親の母語、子どもにとっては親から継承する言語であり、継承語教育（heritage language education）とは親

の母語を子に伝えるための教育支援である（中島2017, p.2）」と定義されている。近年では、トムソン（2021）が表記を改め、「繁生語（けいしょうご）」ということばを提唱した。それは、「海外在住の日本と繋がる子どもたちが親から受け継ぐことばも含めて、親や家族、友だち、社会との繋がりから生まれ、さらなる繋がりを生み、そこで新しい意味を生み出し、その繋がりや次世代に繋げていくことば」と定義されている。ここでの重要な指摘は、継承語が家族単位の親子のことばだけではなく、社会とのつながりの輪を広げることばであり、動的で実践的なことばであること、メトロリンガリズム的に個人に内在する複数の言語資源を肯定的に捉えていることであると考えられる。ドイツの継承語教育グループ「つなぐ」も「わたし語」を提唱しており、個人で複数の言語資源が混在する（とんぼ玉）ことは複眼的なものの見方を促すことができる（とんぼ目）と述べている。

このような背景には、ヨーロッパやオーストラリアのような多言語多文化社会では、メトロリンガリズム的に子どもの言語資源が涵養される土壌があることが考えられる。しかし、今自分のいる環境を考えると、社会や家庭は、多言語多文化社会（家庭）といえるかどうか疑問であり、「つながりを生み、つながりを広げる自己実現のための実践的な繁生語（けいしょうご）」が身につく環境にあるとは言い難い。けれども、私が目指す継承語教育は繁生語教育であり、「日本に繋がる」のベクトルは「日本から繋がる」と逆向きになるが、継承語は媒介として双方向に繋がりを生み、日蘭家庭の子どもが自らのアイデンティティを肯定しながら生きるための基礎になるものと考えている。

3. 調査内容の報告

ここでは、調査内容について説明する。本プログラムの助成を受け、①日蘭家庭の保護者の方にインタビューを行い、継承語教育のあり方や方法、抱えている諸問題について探索的に調査した。②実際の支援のヒントを得るために、テクノロジーを活用したオランダの特別支援教育の授業と、日蘭大学生をオンラインでつなぐ取り組みの実践調査と実施者へのインタビューを行った。

3-1 ①インタビューの概要

ライデン大学、蘭塾、オランダ国立南大学の教員が所属するオランダ日本語教師会メンバーの協力を得てインタビューに協力してくれる日蘭家庭を募集し、オランダで養育中の5家庭、子どもが成人している2家庭、日本で養育中の2家庭から、合計9名の保護者に対面とzoomで半構造化インタビューを実施した。インタビューは1人あたり2時間程度だった。以下はインタビューの実施日、居住国、子どもの年齢（人数）の一覧である。

表1：インタビュー実施概要

実施日	協力者	住居国	子どもの年齢 (人数)
09/15	Uさん	オランダ	小学生～未就学 (3人)
09/16	Bさん	日本	中学生・高校生 (2人)
09/27	Tさん	オランダ	成人 (3人)
09/29	Kさん	オランダ	未就学児 (2人)
10/01	Hさん	オランダ	成人 (2人)
10/12	Oさん	オランダ	成人～中学生 (3人)
10/13	Mさん	オランダ	中学生 (1人)
10/20	Cさん	オランダ	小学生・未就学 (2人)
10/23	Sさん	日本	小学生～未就学 (3人)

*オランダの教育制度では4歳から小学生だが、日本の6歳からの基準で記載している。

また、半構造化インタビューは以下の質問項目をベースに実施した。

表2：インタビューの質問項目

1. ご自身は生活言語についてどのくらい理解していますか。
2. 母語継承についてどのように考えていらっしゃいますか。
3. お子さんがお母さん、お父さんの母語についてどのような意識を持っていると感じていらっしゃいますか。
4. お子さんがお母さん、お父さんの母語についてどのくらい理解していると感じていらっしゃいますか。
5. 子どもの将来についてどのようなビジョンを描いていらっしゃいますか。
6. 母語継承のためになにか取り組んでいらっしゃる（取り組んだ経験）ことがありますか。
7. 母語継承に困難さを感じていらっしゃいますか。どうしてですか。
8. お住まいの国や学校、社会において、同じような境遇の方のお知り合いがいらっしゃいますか。
9. 母語継承支援について、国や社会、家族（周り）は理解がありますか。
10. 今回の調査に参加してもよいと思われた理由はなんでしょうか。

3-2 ②実践調査の概要

次に、実際の支援のヒントを得るために、テクノロジーを活用したオランダの特別支援教育の授業および日蘭大学生をオンラインでつなぐ取り組みの実践動画を提供してもらい、実践の狙いや効果などについて、実施者へインタビューを行った。

一つ目の実践調査は、Beam it Upという会社が提供するテクノロジーを活用したプレイフルラーニングである特別支援教育の授業である。この会社はテクノロジーと教育の融合によって学習方法を向上させるトレーニングをオランダ全土で行っている。他企業とのコラボレーション

によるリモート・プレイフル・ラーニング（Remote Playful Learning）のプロジェクトも行なっている。今回調査した授業の一つは、遊び心のある読み聞かせの授業で、幼い子どもたちがただ座って朗読をきくのではなく、グリーンスクリーンを使って絵本の中に入り込んで、イラストと対話をしたり、先生が話をするのと同時に、絵本の中で遊んだりする。また、少し年齢が高いクラスでは、子どもたちが描いた絵をグリーンスクリーンの背景として使い、子どもたちに自分たちの映画で遊んでもらうこともあるそうだ。このプロセスを通じて、子どもたちは、物語のテーマや、言語、他の子どもとの協働、アイデアを現実に変える方法、視覚化のための技術について学べる。そして、実践者のRobbert Storm氏は、「この実践の最も大切なことは、一緒に楽しい経験ができることだ」と話していたことが印象深かった。



図1 Interactive book reading: Frogの実践



図2 Interactive language learning tool : Dice wordsの実践

二つ目の実践調査は、FoE Japan（エフ・オー・イー・ジャパン）という団体が行った日蘭大学生のオンライン勉強会&交流会であるFoE Japanは、地球規模での環境問題に取り組む国際

環境NGOであり、世界73カ国に200万人のサポーターを有する Friends of the Earth International のメンバー団体として、1980年から日本で活動をしている。今回の交流会では、SDGs世界共通の課題について、日本とオランダの学生代表者がそれぞれ自国の環境問題について発表を行った後、グループに分かれて意見交換や質疑応答が行われた。テーマは「生活と繋がる環境問題」で、使用言語は英語だったが、通訳スタッフを介し、身近なトピックを切り口に、日蘭の学生が環境問題について知識や考えを深めた。交流会後には、小学生くらいの子どもの対象のイベントがあるといいな、という声も関係者から聞かれたそうで、子ども向けの日蘭交流イベントへの可能性を感じた。



図2 FoEJapan オンライン勉強会&交流会の実践

4. 調査から得られた結果

調査から得られた結果についてまとめる。

まず、インタビューの実施によって、日蘭家庭の継承語教育の方法や考え方について知ることができ視野が広がった。そして、インタビュー家庭の保護者の多くが、筆者と同じ悩みを抱えている（きた）ことが確認できた。具体的には表3のようなことである。

特に、子どもの成長とともに家庭内の継承語教育は困難になると話していたこと、学童期を終えた子どもを持つ保護者らの話からは、社会的な「場」における継承語教育によって子どもが自律した日本語学習者として成長する可能性があることが示唆された。よって、継承語に対する社会的な価値づけを行う家庭外の「場」の必要性を改めて感じた。

表3：継承語教育の困難さ

1. 継承語教育は家庭に一任されている。
2. 子どもの成長とともに、社会的に低い価値づけである継承語を学ぶ動機が失われる。
3. 地域に継承語を話すコミュニティがない。
4. 聞く話すメインで、リテラシーは育ちにくい。
5. モノリンガルの環境で育った親に教育のノウハウがない。
6. 年齢と継承語能力の乖離によって適切な教材がない。
7. 良好な親子関係の構築を優先して、現地語ができる親が言語摩擦を回避する。
8. 両言語ができないとアイデンティティが揺れる。

次に、2つの実践調査から、共通のテーマを通しての双方向性のある対話の経験は、深い学びと、新しい気づきがあることが明らかとなった。そして、それは楽しいということである。オンライン会議やCGによる合成など、テクノロジーの発達は、小さな障壁を乗り越え、そのような対話経験の「場」づくりの可能性を広げることが示唆された。いずれの実践も、ことばや知識を習うためではなく、アイデアや気持ちをアウトプットするための具体的な方法や、その機会を与える「場」となっていた。まさに社会との「つながりを生み、つながりを広げる自己実現のための実践的な」動的で生きたことばが使われていた。そのような生きたことばの場を経験することが、子どもたちが継承語に対する肯定的な価値づけを行い、学びの動機を高めるために必要なのではないだろうか。

5. 今後に向けて

最後に、今後は継承語に対する社会的な価値づけを行う家庭外の「場」を創出していきたい。日本語やオランダ語ができることによって世界が広がる、という経験を積むことで継承語を学ぶ動機を高め、子どもが生まれ持つ豊かな言語的・文化的な多様性を育む支援に取り組んでいきたい。松崎（2021）は世界中のCLD児が日本

語で繋がる祭り「CLD festival」を開催している。筆者も2022年から実行委員として参加している。こうした日本語での繋がり構築はまさに「繁生語（けいしょうご）」としての日本語の成果である。国内の継承語教育を盛り上げ、日本の多言語多文化社会を推進するためには、日本における「繁生語（けいしょうご）」を育み、海外への繋がりを生み出していく必要があるだろう。そのために、テクノロジーを活用しプレイフルな活動実践を行って行きたい。

プレイフル（Playful）とは、「何かに熱中しているときの前向きな気持ち」のこと、「Playful Learning」のための心のあり方を意味し、「Playful learning」とは、自分が周りの世界とどのようにかかわっていけば楽しくなるか、どのようにすれば周りの環境も巻き込んでプレイフルな状況を生み出せるかという考え方、アティチュード（姿勢）、振る舞いのことであると定義されている（上田2012）。今回の実践調査はいずれもプレイフルな実践であり、今後の「場」の創出のために大変参考になった。今後の支援のあり方として、表4にあることを踏まえながら具体的な支援の方法を考えていきたい。

表4：支援のあり方についての考察

1. 家庭から社会へ、継承語教育の「場」を社会の中に創出する。
2. 地域から、オンラインへとつながりの輪を広げる。
3. 日本語を学びたいオランダ人、オランダ語を学びたい日本人の交流など、継承語が社会的に価値づけられる環境を提供する。
4. 「教育＝教える」から、親子が「ともに学ぶ」当該の社会でマジョリティ言語を話す保護者の役割に注目する。
5. 年齢にあった知的好奇心を満たす教材の開発や活動の内容を考える。
6. リテラシーの伸長にICTを活用する。

北村他（2020）は、肯定的で多元的な社会的アイデンティティを確立することは私たちの精

神的健康の維持や生きがいの獲得のためにも重要な発達条件であるとされている(p.71)と述べている。また、地球市民教育 (Global Citizenship Education) の学習活動において醸成されるべき行動面での資質として「対話」があると考えられる (p.74) と指摘している。つまり、継承語教育は子どもの多元的なアイデンティティの確立に重要であり、そのためには、メトロリンガリズム的な「対話」を生み出す「場」の創出が期待されていると言える。

しかし、今回の調査では、当事者である子どもたちにどのように継承語教育の重要性に対する「気づき」を促し、対話の場に参加してもらおうかという切実な課題が残された。とりわけ、小学校高学年以上の思春期の子どもたちを持つ保護者にとって、子どもとの良好な親子関係の維持は継承語云々の前に乗り越えなければならない壁として高く存在している。

参考文献

- (1) 上田信行 (2012) 『プレイフル・ラーニング』三省堂
- (2) 尾辻恵美 (2011) 「メトロリンガリズムと日本語教育—言語文化の境界線と言語能力—」『リテラシーズ』9 くらしお出版, 21-30
- (3) 北村友人, 佐藤真久, 佐藤学 (2020) 『SDGs時代の教育—すべての人に質の高い学びの機会を—』学文社
- (4) トムソン木下千尋 (2021) 「継承語から繋生語へ日本と繋がる子どもたちのことばを考える」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する—』第12号, 2-23
- (5) 中島和子 (2017) 「継承語ベースのマルチリテラシー教育：米国・カナダ・EUのこれまでの歩みと日本の現状」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』13, 1-32
- (6) 松崎かおり (2021) 『海外の日本語教育専門家の知見に基づく CLD 児のためのイベント開催』
https://www.nkg.or.jp/news/assets/2022_05_19_05.pdf (2023年3月17日)
- (7) わたし語の広場—つなぐ, <https://tsunagu-jki.de/> (2023年3月17日)
- (8) Beam it Up, <https://beमितup.nl/over-ons/> (2023年3月17日)
- (9) FoE Japan (エフ・オー・イー・ジャパン), <https://foejapan.org/> (2023年3月17日)
- (10) Zuyd University of Applied Sciences, <https://www.zuyd.nl/en> (2023年3月17日)

謝辞

長時間にわたるインタビューにご協力くださいました保護者の方々、実践動画を提供して下さった実践者および関係者の方々に厚くお礼申し上げます。また、蘭塾、オランダ日本語教師会メンバーの T さんには、多くの日蘭家庭との縁をつないでいただきました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。